

金沢大学創基150年記念「講演会・シンポジウム」シリーズ第1回
平成21年度金沢大学資料館特別講演会 アーカイブスと自校教育

自校教育の役割と大学の歴史 —アーカイブスの使命にふれながら—

A NEW MISSION OF THE UNIVERSITY EDUCATION
— How to develop the student' understanding of their own university
and the contribution of the university archives —

講師 寺崎昌男氏（立教学院本部調査役）
日時 2009年11月5日(木) 13:00~15:00

はじめに

本日はお招きいただきましてありがとうございました。全部ペーパーの資料だけでお話しさせていただきますが、どうか我慢してお聞きいただきたいと思います。

私がこの金沢大学にお邪魔したのはこれで5回目ぐらいですが、初めに来たのはまだ城内におられるときで、旧制第四高等学校の校友会雑誌を検索に来たのです。すると、ほかの旧制高校所在地では焼失している校友会雑誌が、ここには全部そろっていたのです。本当に驚きました。

考えてみると、旧制高校があったような土地は全部、空襲を受けました。例えば鹿児島市に第七高等学校があったのですが、それも城そのものが空襲を受け、全部焼けています。そのように、ほかをどんなに探してもないのが、金沢大学に来てみたら全部ありました。そして図書館の方に聞きましたら、これはよそから参照に来られる方の一番多い書籍だということです。なぜなら、多くの作家の処女作や、かの高名な西田幾多郎の『善の研究』の第一章の文章が、きちんと四高の校友会雑誌「北辰会雑誌」に載っているからです。

金沢大学は非常に大事な資料をお持ちの大学だと思います。ですから今回、150周年を機に、こうした文化財を大いに外に向かって宣伝されるといいし、またそれに値すると思っております。

1. 自校教育への気付き—ベースとなる資料室

さて、今日掲げましたテーマは「自校教育の役割と大学の歴史—アーカイブスの使命にふれながら」ですが、古畑徹先生のお話とは少し違う意味で、風呂敷を広げた話をさせていただきたいと思っております。

まず、どうして自校教育などを始めたかということです。

ちょうど今から12年前、1997年から、私どもは立教大学で「全学共通カリキュラム」を実施しました。その第1年目に、プランをした人間としては、やはり一科目ぐらいは持たなくてはいけないと思って、「大学論を読む」という講義を受け持ったのです。

どういうことを話そうかと思って、いろいろ考えました。フンボルトのベルリン大学論を読んでみようか。また日本でいうと南原繁の大学論などをやってみようかなどと思ったのですが、すべて

はかない夢でした。教室に行ってみたら55人いましたので、まずゼミは成り立たないということが分かりました。次に、カントやフンボルトどころの話ではない、南原繁と言ったら、「それは誰ですか」という顔です。誰も知らない。では、もう現在の大学の話をするほかはない、と思って、まず「今の大学はどうやってできたか」という話をしました。55人のうちの30人が1年生、あと25人が2、3、4年生でしたが、このテーマは結構面白いと思って聞いてくれたようです。

しかし、それを3時間やった後で、さてこの次の時間はとまっているうちに、今日の前にいる学生の前で、歴史や大学論の話だけをしていくのは空しい、という気がだんだんしはじめました。

当時、東大から立教大学に戻って5年目でしたが、経歴はともあれ、自分は今、立教大学教授として、ここで話している。向こうの55人は立教大学の学生として聞いている。すなわち共通して一番よく知っているのは立教大学ではないか。これは立教大学の話をした方がリアリティがある、と気が付いたのです。そこでシラバスを全く無視して、「私は来週から2時間、『立教大学を考える』というテーマで講義します」と言ったのです。彼らは「へえ」という顔で聞いていました。その上で、学生たちの本音を聞いてみると、元々ここに座ろうと思って来ているわけではないことがよく分かりました。男の子の半分は早稲田に行きたい、女の子の半分ぐらいは慶應に行きたいと思っていた学生たちが、たまたま立教に入り、この教室に座っているわけです。そういう中で、何とか大学生活を始めようとしていることが分かりました。

また、上智大学は立教のライバル校の一つで、青山学院も明治学院もそうなのですが、立教と明治学院と上智大学と青山学院とは、それぞれ宗派が違うのだけれど、知っているかと聞きましたら、全然知らない学生ばかりです。カトリックとプロテスタントも世界史で習ったことはあるけれど、それが今の大学の違いになっているなどは思っていないのです。

「どうして立教に来たの」と言ったら、「JARパック¹で来ました」。上智・青山・立教です。決まればいいと思っていたら、立教が一番先に早く決まったから座っていますというような学生がほとんどなのです。

彼らに2時間、立教の歴史を話しました。その反響は、40年間大学の教員をやってきた私も初めて経験したほどに大きく、ほかの授業の比ではなく、彼らの心に届いた、と思います。このように感心するのか。「感心」というのは、「誇りに思う」という話ではなく、「よそとの違いが分かった、それで安心した」ということでもあります。すなわち安堵感というのが、自校教育をやった場合の学生たちの感覚の、かなり大きい部分です。居場所が分かった、自分はどこにいるのかが分かったという成果があることを、そのときにつくづく感じました。

講義のベースになったのは、その年の春からちょうど『立教学院125年史資料編1』が刊行直前に至っていたことでした。つまり、学生たちにコピーして配るだけの確実な資料があり、その他、現代のジャーナルにのった資料なども全部入れて、私はベースとなる資料に恵まれました。そのときに本当に思いました。学生たちに、この大学はどういう大学かを教えるときの一番のベースは、やはりその大学に関する絵や写真も含めて、正確な資料であるということです。

今申したのは春学期なのですが、秋学期には「文学部総合講座」を頼まれたのです。これも半年間やるということで、基本は「日本における私学」の話だったのですが、今度はその中の3時間をかけて、また詳細に立教の話をしました。反響もとても良かった。いろいろなことが初めて分かったということです。今度は2回目ですから、非常に張り切って、詳しく話をしました。

2. 広がる自校教育

偶然ですが、私が始めた12年前と同じ年に、明治大学が始められたことを後で知ったのです。あの大学は大きい大学ですけど、元々どういう人が創ったのかが、はっきりしませんでした。100年史をやっていく間に、それが分かってきて、1997年から「日本の近代化と明治大学」という題で授業を始められたのです。私を知っていたのは、立教で始めたという自分の事実だけでした。

ところが、今になってこの自校教育が、非常に広がってきております。

資料1は、秋田大学の教養基礎教育研究センター・大川准教授の調査結果で、最近発表されたものです。2008年の8月時点の調査ですが、752大学中373大学が回答されて、うち136大学、18%が、既にこの手の授業を実施しておられます。私は3桁になっているとは知りませんでした。その中で、特に設置者別でいくと国立は非常に多くなっており、33大学、回答中の53%が既に自校教育をやっておられます。公立もまた大変多くて10大学、私立が93大学と広がっています。

実施目的は、それぞれ少しずつ違います。

国立大学では、「自校の現状の理解」に配慮していらっしゃるし、それを目指しておられます。それから、「自校史と沿革の理解」が2番目です。

公立はちょっと違い、やはり大学が「立地する地域の理解」が一番上に来て、それから「自学の理念・使命・目的」を周知させること、最後が、「専門教育の一環」です。

私学の場合は、「自学の理念・使命・目的」の周知、すなわち「建学の理念と建学の精神」をまず分からせようとしておられます。それから、「自校史沿革」の理解、最後は「大学への帰属意識の涵養」です。この3番目にとても力を入れておられるところも多いです。その極端な形は「愛校心の育成」で、これを本気で頭に置いておられるところも少なくないようです。

例えばある私学の例ですが、大学に在籍している女子学生が、すし屋でアルバイトをしていました。そこに先輩だという年配の客が来て、その子が母校の学生だと聞いて、「ちょっと校歌を歌ってみろ」と言いました。女の子が「どういうものか知りません」と言ったら、本気で怒られてしまった。その出来事によって、自分の大学とは何か、私は全然知らなかったと反省した、などという例もあります。そういうことをなくすためにやるとおっしゃっている大学もあります。このように非常に広がっております。

立教大学でシンポジウムを開きました。今年1月です。3年前にGPを取って、「立教科目」を教えています、ということで、お金が来たのです。その申請が通り、それが終わったところでシンポジウムを開きました。西から九州大学、広島大学、それから京都大学、名古屋大学、東京で明治大学と立教大学、それから東北大学の計7大学で現にやっておられる自校教育の発表をしていただいて、どこまでやったか、問題は何かと話してもらったのです。

単にウェブで知らせただけのシンポジウムでしたが、驚いたのが、中身というよりは、むしろ参加者の多さです。全体で110人ぐらいお見えになったのですが、そのうち半分以上は他大学の方たちでした。51大学から76人参加されました。つまり、1校から2～3人お見えになっているところもあり、それも北から南まで、全国からお見えになったのです。やはりどの大学でもやろうと思っいらっしゃる。ついては、今実践されている大学で何が行われているかを聞きたいと思って、見えている方たちでした。全体としてこれからやろう、やらなければならないと思っておられる大学が、実は相当あるということです。

3. 自校教育が必要な理由

今の大学状況を背景としてその理由を考えますと、先ず国立大学の場合、やはり法人化が非常に大きいきっかけになっていると思います。入ってきた学生たちに「うちの大学はどういう大学か」ということを知らせたい。いわば志願者集めという苦勞が生まれているということです。同時に、大学教育研究センターや資料館が整いはじめたことも大きいと思います。

2番目の公立では、特に地域との連携が求められています。例えば大阪市立大学では、大阪市はどのような要望でこの市立大学を創り、大学は何をやったかということを、学生たちに非常に熱心に教えておられます。地域との連携を証明し表明する必要性が高まっているということです。

私学はまた複雑で、猛烈に多極化しています。例えばいわゆる難関校の場合は、学生たちに自分のいる大学のことを知っておいてもらわないと、学生たちは落ち着きません。A大学やB大学に行った学生は、落ち着いているかもしれない。しかし、Cだと、もう落ち着いていないわけです。「ちょっとできたら、AやBへ行けたのに」と思う学生が多い。偏差値的に上のレベルになればなるほど、よそへ行きたかったと思う率が高いのです。

東大で、私もよく分かりました。14年間ほど教えたのですが、東大の学生たちは全部本意入学者でほっとしているかということ、そのようなことはありません。理科Ⅱ類に行った学生は、もうちょっとできたら理科Ⅰ類に行けた、と思っています。私のいた教育学部に進学しようと思って、東大に志願した人はほとんどいないわけで、進学者の大多数が不本意と言ってもいいぐらいの状態です。理科Ⅰ類の学生には、医学部の理Ⅲへ行きたかったと思っている者も少なくない。つまり考えてみると、日本の大学は不本意入学、不本意学生だらけなのです。そういう点で、上の方の学生にこそ、実は今いるこの大学はどういう特質があるかを、きちんと教える必要があります。

一方で、志願した学生はみんな入れるという大学もたくさんあります。ご承知のように、定員割れの大学、あるいはその寸前という大学もたくさんあります。この場合、学生たちは、本当に偶然に今いる大学へ来ているわけです。大体、高3の2学期ぐらいにはAO入試と推薦です。この推薦も、自己推薦もあれば指定校推薦も、いろいろな方式があります。関係高校からの進学もある。これらは、高3の2学期には大体決まっているわけです。後はのんびり過ごす。受験勉強もしたことがないという学生がたくさんいるわけです。その学生たちは、どういう気持ちで大学に来ているかというと、はるかに偶然に座っているわけで、どのような大学かということは、ほとんど意識すらしないで済む状態だと思われまふ。したがって、やはり学生たちに「うちの大学はどういう大学か」を教えなければなりません。この必要性が非常に強くなってきていると感じられます。

かといって、いわゆる難易度の低い大学だけが最近自校教育を始めておられるかというと、全くそうではなくて、昨年からはじめられたのは、例えば北大、一橋大、専修大といった学校も、新しく自校教育にそれぞれ力を入れておられます。聞いてみると、それぞれの事情があり、一橋などは如水会という同窓会の方たちが、何としても後輩たちに一橋のことを教えたいと言って始められたのが原動力になっています。

もう一つの背景として、今、大学はGPといった申請書をたくさん出さなければなりません。いろいろなGPを出すときに「あなた方が考えておられる改革、やろうと思っている授業は、あなたの大学の特質とどう関係していますか」、あるいは「歴史の中で、どういう必然性があるかこれを出すのですか」といったことを否応なく書かされます。そのときに初めて慌てるのが、かなり情けないですが、現実の話です。そのときに資料館がなかったら、だめなのです。分からない。伝聞だ

けではだめで、確たる資料的根拠を持って書けるか否かというのは、申請書の説得力にかかわってきます。はっきり言うと、お金とのかかわりという、非常に強い動機があります。その中で、やはり、自校のことを明らかにしておく必要が非常に強くなってきているのです。

4. 自校教育の効果

4-1. 学生にとってのメリット

自校教育をなさっている方々のお話を聞くと、いろいろな見方がありますが、自分が歴史を専攻していますので、我田引水的になりますが、やはり中心をなすのは自校史教育だと思います。学生たちに聞いてみても、歴史という核があるというのは非常に大事な要素のように思われます。例えば彼らが高校を出るまでに一番教わっていないのは日本史の中の近現代史で、とても弱い。自校史という窓口からそこを教えれば、非常に大きい魅力でもあるようです。

ただし、学生たちは、自分がなぜここに座っているか、自分が座っているこの大学は、どのような努力の下に創られてきて、どのような人がここに関わったか、今どのような問題を持っていて、将来、何が課題かといったことを聞きたいと思っているわけではありません。つまり、そのような知識に飢えているわけではありません。ぼうっとして入って来たのだけれど、言われてみればそうか、という安堵感を得るのです。

4-2. 学生が求めるディスクロージャー

そういう安堵感を得させるためには、何が必要か。私がやってきた経験から見ると、一つは、学生諸君もディスクロージャーを望んでおり、すべてのことを知りたいと思っているということです。残念ながら、これは学長の入学式の告辞ではだめなのです。どの学長も、告辞づくりには相当苦勞なさると思います。しかし、申し訳ないですが、ほとんど学生の中に残っておらず、何も知らないのです。

立教で教えたとき、立教大学が何年にできたかも、もちろん1年生はほとんど誰も知りませんでした。「明治7年だよ。何人で始まったと思う?」。入学式ではちゃんとチャプレンが「5~7人で始まった」とおっしゃっていますが、全部忘れて何も覚えていません。私が授業の中できちんと教えると、「ああ、そうだったか。東京の築地で始まったか」などと改めて思い出すのです。

もう一つ、授業をやっていて良かったのは、講義という大学固有の教授形態の強みです。講義の基本は、教える側が、これは真理だと思ったことを、もっぱら言語によって伝えることが中核で、自校教育にはその利点がいくらでも生かせるということです。それを生かすと何が生まれるかという、大学のことをあからさまに話すことができます。

私は最初、迷いました。きれいな歴史だけを話そうか。建学の理念、ウィリアムズ主教が私塾を創られた経緯など、美しいことがいろいろありますから、それを教えようかと。しかし、そのようなことは、学長が入学式のときに話しておられるので、やめようと思い、実態をずっと話していったのです。悪いことを話すのはどうしようかと思ったのですが、やはり全部、覚悟を決めて話しました。

立教で私が一番苦しんで迷った挙句、しかし話してしまったことは、例えばセクシャルハラスメントの大スキャンダルが起きたことです。若い方をご存知ないと思いますが、1973年ある助教授によって引き起こされた大スキャンダルです。結局、セクハラにからむ殺人と一家心中を犯した事件

でした。

それを話そうかどうかどうしようかと私は迷ったのですが、全部話しました。そのような大学なら辞める、という1年生がいるかと思ったのですが、誰もいません。私も最後はキャスターの関口宏になったようなつもりで、全部話しました（関口宏は立教の卒業生です）。しかしこの話をしても、学生諸君は誰もそのことで失望もしていないし、大学を辞めようなどとも思っていない。ただ「そういうことを聞けた」ということが嬉しかったらしいのです。

もう一つは戦時下のことで、立教はチャペルを軍部に明け渡すぐらいの屈服をしました。これも全部話しました。

私は、こういう経験を経て、初めて分かりました。自校教育は、本当のことを話していいのです。

同じ年の後期には、大学紛争当時の立教の対応についても詳しく話しました。よその大学とはここが違ったということを中心に話しました。バリケード封鎖をされた5号館を開放するのに、立教は絶対に機動隊を呼びませんでした。全部、先生方が開放していったという歴史があります。他方、同じ時期に別の大学がどういうふうであったか、あるいは全国はどうだったかという話をしました。これも学生たちは非常に喜んで聞きました。

自校教育においては、授業という形、つまり講義という教授形態の利点を、思うさま生かすことができることは非常に大きい強みです。儀式や祭りの場では、できないことです。そういうふうにとやると、学生たちは非常に喜んでくれます。自慢するようですが、一昨年でしたか、ある修士課程の女子大学院生が全く別の教職課程の部屋を訪ねて来て、「私は寺崎先生のあの授業に出て、そこから立教でしっかり勉強しようという気持ちになり、今、大学院に来ている」という話をして帰っていったそうです。恥ずかしいから名前は言わないで置いてほしいというので、いまだに誰か分かりませんが、そういう学生が生まれてくるのです。安心するのです。ここで本気で勉強してみよう、という気持ちになるのです。

4-3. テキストを作ってみて分かること

次に申したいのは、テキストが必要だということです。古畑先生がテキストをお作りになった²のは、いいことだと存じます。私どもも作りました。『立教大学の歴史』という割に厚い本は、そのテキストのために作られたものです。もう一つ、『立教学院の歩いてきた道』という薄いブックレットを作り、簡単な歴史を書いてみたのですが、一問一答で立ててみましたら、みんな「読みやすい」と言ってくれます。

この中で一番評判がいいのは、モットーと言われているような言葉の起こりです。「立教のモットーは『自由の学府』だとしょっちゅう言われるのですが、この言葉はいつごろから使われ始めたのですか。どういう意味でしょうか」という問いを作ってみました。すると、誰もこれを知らなかったのです。大正年間にできた校歌に、1人の総長が最後の一句を付け加えたくて「自由の学府」を付けたのです。



もう一つは、「なぜ立教という学校名が付いたのか」ということも、書いてみて、自分としてもとても面白かったです。3つ説があって、その3つの説のどれが正しいか、定説がないのです。しかし名前は付いている。同志社や上智などは、全部いわれがあります。立教だけは分からない。しかし、その分からないことを誰もあまり気にしていないというのも、またこれも校風の一つではないかと思い、そのように書きました。

本にしてみると、はっきり分からない限界そのものも分かって、とても面白いです。自校教育にはそういうテキストが要る、ということです。

また、テキストを作ったり、学生たちの評価を聞いたりすると、いろいろなことが分かります。九州大学のあるパンフレットに載っている学生諸君の反応の一つですが、農学部男子学生が書いていたのは、「私は長い間、旧制高校は旧姓佐藤や旧姓田中という、あの旧姓だと思っていました。祖父も父も、良かった良かったと言うから、「旧姓」高校とは、そういうものだったのかと思っていたら、旧制度の「制」だということを初めて知りました」などという反応が返ってくるのです。こういうことを言葉できちんと教えるのは、やはり大事なことなのです。恐らく、九州大学は福岡高等学校という旧制高校も併合して出来ましたから、「福高は、福高は」と、家族や先生方も話していたのだと思います。だから、その学生にしてみれば、福高というのは、今もある県立の福岡高等学校ではないかとずっと思っていたのでしょう。入ってみて初めて、そういうところだったのかと分かったのです。

その他、自校教育をやってみると、学生たちの、いわば心の影のようなものが本当に分かってきます。例えば九州大学の同じ文集を見ますと、九州大学をなぜ受けたかという問いに答えて、「怠け者だと思われなくなかったからです」と書いてあります。

立教の場合ですと、一番トップには、「希望の学部・学科があるから」が来ますが、「学内の景観が良いから」が2番目です。自校教育は、学生たちの本心を知る機会にもなります。

4-4. 教職員にとって

では、自校教育は教員と職員にとってどういう役割を持つかということは、最近だんだん分かってきました。

一つは職員への意義です。職員の方にとってみれば、自校教育は、実は今求められているSDの重大な内容です。出身者で母校に勤めている方でも、聞いてみると、ほとんど母校のことをご存知ありません。歴史はもちろんのこと、先ほど言ったような背後の事柄等々も知らない人が多い。これはSDの大事な一環になることがよく分かりました。

私は1学期と2学期、6月と10月、つい最近、2回新任職員への講義をやりました。特に最近の新任職員には、中途就職の方が非常に多いです。企業に勤めたり、いろいろなところに勤めた方が大学に入って来ます。そういう方も含めたSDの中身として、「うちはこういう大学だ」という特質を教える必要がある、ということに改めて感じました。

教員はどうか。教員こそ、実は一番知りません。自分の若いころを思い出してみても、どの大学に勤めるか、A大学に決まらずB大学に行くというようなことは、就職口が一つあったという事実には過ぎません。せいぜい、学生のレベルはどうだろうか、研究条件はどうだろうか、給料はどうだろうかということを気にしているに過ぎません。その大学がどうやってできて、どうやって今ここにあるかなど、それらを一番知らないのは教員です。やはり教員の方には、自校教育の実践はFDの一つの形態となります。むしろ聴講者になってほしい位です。そのためにも、ちょっとで

も読んでみようかというテキストを出しておく必要があると思います。

SD と FD の一部になるという点で、自校教育は非常に重要な役割を果たしていると思います。

4-5. アメリカの大学アーカイブス

私はアメリカのアーキビストの大会に参加したことがあります。SAA (Society of the American Archivists) という会で、3000人ぐらい会員がいて、そのうちの800人ぐらいが集まって、大きなホテルを借り切って大会を開きました。私はまだ東大にいて、東大100年史の仕事が一段落したときでしたので、参加してみました。日本人は私一人だったのですが、おかげでいろいろなことが分かりました。

ひとつは、SAAの中で、University and College Archivists は、相当な勢力を持っているということです。アーキビストには Business Archivists (会社のアーキビスト) もいますし、Court Archivists (裁判所のアーキビスト) など、いろいろなアーキビストがいますが、その中で University and College Archivists は大きい力を持って活動していることがよく分かりました。

2番目に、名門大学だけがアーカイブズを持っているわけではないということです。我々が東大時代にやった調査では、アメリカの大学の、少なくとも4年制大学の93%ぐらいに、必ずアーカイブズがあります。先述の大会に行ってみると、ジュニアカレッジの人、あるいはコミュニティカレッジの人も来ています。お宅ではどういうことをやっているのか、一遍ちょっと立ち寄らせてもらいたいと言って、行ってみると、まことに涙ぐましい努力をしています。例えば、この地域の発展に我がジュニアカレッジはどういう貢献をしてきたかをテーマにして、ずらっと展示をしている大学もあります。

他方、名門大学ですと、例えばシカゴ大学は Trustees (理事会)、学長、さらにそれに準ずるいわばトップ経営層の文書、日本で言えば管理運営文書を、きちんと保存・整理しているのが自慢なのです。ミネソタ大学の場合は普通のアーカイブスなのですが、驚いたのは、例えば1920年代の時間割は何かありますかと聞いてみたら、ぱっとバイオロジーの学部のを引っ張り出して、これが1927年の時間割ですと、すぐ見せてくれるのです。

先ほど古畑先生に案内していただき、展示を見させてもらいました。昭和25年以來の大学要覧がきちんと残っていますが、それはとても貴重なことです。廃棄していいもので、保存書類ではないからです。ましてや時間割は、その年の教官と学生にしか関係ないので、すぐ捨ててしまうのですが、実はものすごく大事な大学史資料です。

このように、大学のアーカイブスは特徴があってよいのです。ただし、特に教育関係の資料は残り方が少ないし、大事に取っておかなければいけない、と私は感じました。

アメリカでは、あらゆるところに大学のアーカイブスがあることは非常に大きい発見でした。聞いてみると、アメリカでは LMA (Library, Museum and Archives) というスローガンがあって、大学人たちは、この3つを持つことが近代大学の証だとみなしているというのも、発見の一つでした。

もう一つ、アーカイブスを持つということは、大学としては実に当たり前のことであるのだけれども、それは伝統に沿っているということです。その伝統とは、一つはヨーロッパから来た伝統である「manuscript (草稿・原資料) の保存」ということです。それがアメリカに移ってきて、もう一つのファクターが加わった。「大学は社会に対してサービスをする機関である」というファクターです。それに沿って自分たちはアーカイブスを作っている、とある専門書には書かれており、いくつかの大学アーカイブスを見ただけでも、そのことは非常によく分かりました。日本ではよく「名

門大学ではないから、うちはアーカイブスなどはありません」という方がありますが、そのようなことはありません。たとえ創立10年でも、やはり作った方がいいと思います。

5. 今後必要なこと

5-1. 質保証のポリシー

今後注目が必要なことの一つは、大学政策における「質保証」というポリシーと大学アーカイブス設置との関係です。質保証は（学士力の保証などいろいろな言い方がされますが）、間違いなく、これから数年間、大学政策の基本になっていきます。

ご承知と思いますが、この前から中教審が3度答申を出しました。第1回目の答申は中間報告で、「学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）」という題でした。2番目は「再」という字が消えて、「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」です。最後に、去年の暮れにやっと本答申が「学士課程教育の構築に向けて」と題して出ました。3つの厚い答申を読んでも、一貫しているのは質保証の問題です。

これらの背後にあるのは、世界的な質保証の動向の中での日本の危機感です。特にヨーロッパで行われているパッチャーの質がどれほど保証されているかが大学の活性化につながるという、大きな動向がプレッシャーになっています。ヨーロッパは世界中の留学生がアメリカに集まることを何としても食い止めたい。そしてEU圏内大学間での学生の流動化を進め、やがては東アジア、あるいは東南アジア、さらにはラテンアメリカ等々、世界の国々からの学生をヨーロッパに集めたいという強い要求があるわけです。イギリスはだいぶ前、サッチャーの時代にそのことが進んでしまいました。今はヨーロッパ大陸でそれが進んでいます。これが大きいインパクトになって、今、質保証という動向が日本に来ているわけです。アメリカはアメリカで、負けてはいられないということで、大学評価をきちんとやる。評価を基準に置いた大学教育のクオリティの保証が合言葉になっています。

もっとも、よく考えてみると、この言葉もあいまいです。質とは何の質か。授業の質のことか、学生の学力のことか。あるいは大学そのもののフィジカルな、物理的な設備の保証のことか。こういうことになると、実はそれから先がかなりあいまいで、私は、かなり怪しげな標語だと思いますが、しかし、退くことはなく、これは続いていきます。その質保証というポリシーのためには何が必要か。そこに浮かんできたのが、今申した歴史資料と、それから沿革史です。

「金沢大学50年史」が出されています。私も「東京大学100年史」を作られました。ああいうものは、これまでは引き出物で、記念式典のときに来て、突然持って帰らされる重い本、誰も読まない本でした。しかし今やあれは引き出物ではありません。その大学の一番スパンの長い自己点検評価の報告書です。

ついこの間でき上がった、財団法人大学基準協会による、大学認証評価機関申請のためのハンドブックを見たら、一つは大学沿革史の編纂、第2番目は大学関係資料の保存と公開との二つがきちんと載っています。つまり、沿革史をきちんと書いているか、歴史資料をきちんと収集し公開しているか。それを評価の基準にするという宣言です。そこまで来たかと思って、沿革史はもう引き出物ではない、と思いました。

2番目は、同時に自己点検評価活動も非常に大事な仕事になってくるので、質保証は自分でおやりなさいという話になってきています。そのためには、最も長いスパンにおける自己点検評価活動

が、例えばアーカイブスの設置になり、下の展示室でなさっているように、その成果を学内外に公開する作業までいくということです。

5-2. 学生たちの求めるもの

5-2-1. 「差異感」の再構築

もう一つは、学生たちにとって、自校教育やアーカイブスの設置はどういう意味を持つでしょうか。

私は、学生のために行うということこそ、実は大学改革の究極の目標だと思っています。大学はあらゆる改革を試みるべきです。でも何のためにやるか。それは学生のためであるということです。ここさえ外さなければいいと思っており、そのためにも、自校教育が学生のためのどこに役に立つかということ、やはり確認しておく必要があると思います。

一つは、「差異感の再構築」と書きましたが、学生たちは、先にも申しましたように、大学のことをほとんど知りません。聞いてみると、先ず問題にするのは偏差値で、学生たちは誰でも痛いほど、また空気のようによく知っています。2番目は難易度、それから3番目が交通の便、4番目が…と来て、その中に学内の景観などもちゃんと入るのですが、そういうことしか知りません。

そうではなくて、私どものいる大学はほかと違ってどういう特質があるか。そういうことについての教育は、高校でほとんど受けていないと思います。高校の進路指導室などに行っても、進学有名高校などであれば、大体送ってくる大学案内をずらっと壁に置いてあるだけです。高校の先生方に聞くと、「大学はもっときちんとした案内を出してくれなければいけませんね。高校生が手に取りませんよ」ということを厳しく言われるのですが、どうしたらよいか、なかなか分からない。その中で学生たちが自分で選ぶのです。

立教の学生の入学動機、なぜ立教を受けることにしたか、どういうことをやろうと思ったかについて、誰に相談したかということをお聞きすると、やはり驚くほど、自分で決めていることが多いです。では自分でどの基準で決めるかということ、最後は偏差値と難易度です。

ところが、彼らが同じような大学とうちとはどこが違うかが分ると、全くそれとは違う学習動機が生まれてくるようです。例えば立教の例で申しますと、明治29年に訓令12号事件が出て、多くのキリスト教系の学校は、脅威にさらされました。どうしたらよいかというときに、学校の対応はそれぞれとても違いました。その辺を、いいとか悪いとかいう話ではなく、違いをきちんと教える。紛争にどう対応したか、この違いも教える。同時にしかし、うちの文学部と、別の大学の文学部とはどこが違うか、経済学部の歴史は、どういうことを表しているかという差異を教えると、彼らは本当に驚いて聞いてくれます。ですから、先ほどのつながりで言うと、スキャンダルも、特質も、同じように話していい。そうすると、彼らは安心するのです。満足という言葉が私が使わなかったのは、「知りたい、知りたい」と思っているわけでは毛頭ないということです。ぼんやり座っている。しかし、聞いてみると安心する、という構造だと思います。

5-2-2. 初年次教育の一環として

もう一つは、今言われている初年次教育も、これから非常に強く点検される活動になるでしょう。その初年次教育の一環として、自校教育は大きい役割を果たします。

特に「高校の学びから大学の learning へ」ということについて言えば、彼らは高校での勉強と大学での勉強とのどこが違うか、ということをおぼろげに分かれません。はっきり言えるのは、高校ま

での学習の様式が濃厚に残っているということです。だからノートが取れないのです。高校までは、「ノートを取る」というのは、「先生が黒板にきちんと書いてくれる要点をそのまま写すこと」でした。ところが大学に来て、先生が話している要点をノートに書くという癖が全く付いていないことに直面します。第一、ノートを持つことがほとんどなく、ルーズリーフで終わっています。先生の配ってくれる資料をファイルしていればまだいい方です。そのようなわけで、彼らは大学に入ったときに、大学での勉強はどういうスタイルでいくのかが分かっていないことが、とても多いのです。

私たちはレポートやレジュメなどとすぐ言いますが、それも分かっていません。「先生、レジュメとは何ですか」とこっそり聞きに来ます。それから、レポートはみんな感想文だと思っています。感想文とレポートは違ふとしっかり話してあげると、「仮説」などという言葉は聞いたこともない。仮説と検証と結論があって、仮説と結論が同じようなものは、実は研究とは言わない、と教えると、「あ、そうですか。レポートとは調べて書くのですね」などと言います。本当にそれが実態なのです。

高校を出るまで、自分で調べてものを書いたという経験を、日本の高校生はほとんど持っておりません。ですから、作文というと、「イチローの卒業生文集」のようなものを思い出すのがせいぜいのところで、そういうことから直していく必要があります。その一環として、私は初年次教育は、極めて重要な役割を果たすと思います。その一環として、自分の入った大学自体のことを知る、という学習が位置づくのです。

5-2-3. 学習環境づくり

最後は先ほど繰り返しになりますが、実は自校教育が広い意味での学習環境づくりに役に立つということです。彼らはこれで大学への帰属感を持つことができます。非常に強く言いますと、「参加」している感じも、育てることができます。

桜美林のころに、200人ぐらいいましたが、共通教育の授業で、2時間にわたって「桜美林大学を考える」という内容を盛り込み、それから沿革史をずっとやってらっしゃる先生にも2時間ほど話をさせていただいて、最後に、「学長への手紙」という題で小レポートを書いてもらいました。学生たちは、とても張り切って書きました。学長の顔を覚えているかということ、誰も覚えていません。入学式のときに、遠くで話をした人、ぐらいいの記憶です。学長室へ行って一番大きな写真を借りてきて、黒板に貼って、「この人だよ。覚えている？ この人に手紙を書きなさい。私が責任を持って取り次ぐ」と言ったら、本当に一生懸命書きました。

書いた内容は面白かったです。建学の理念をもっと教えてくれなど、そういう話だけかと思っただら、とんでもありません。「レストランの献立が悪い。もう少し何とかしてほしい」とか、「スクールバスの最後の時間が全然合わない。もう少し遅くまで出して」など、そのようなことがたくさん書いてありました。なるほど、彼らは今、こういう形で大学に参加している意識が目覚めたのだと改めて思いました。もちろん、中には「私たちが卒業して何年か後に、『昔、桜美林という学校があったのだけれど』などと言わないでいようにサバイブしてください」というものもありました。実はそういう形で自校教育は、自分と大学との距離をぐっと縮めることができるように思います。

5-3. 大学情報の日米差

にもかかわらず、私たちが今からやらなければいけないことの一つは、責任あるメディアや高校がもう少しきちんと、大学に関する情報を高校生に教えるべきだということです。今は各大学の努

力で、それができているでしょうが、もう少しきちんとした印刷物や発行物がないとだめです。

アメリカには、「Best College and Universities」³と、もう一つ、「FISKE」⁴があって、後者の方が特に親切です。こちらの図書館にもあるかもしれませんが、「FISKE」に書いてある大学情報は見事なものです。個別の大学について、きちんとカリキュラムが strong か weak かまで、書いてあります。atmosphere（雰囲気）はどうであるかなども全部書いてあります。この「FISKE」誌を責任編集している FISKE 氏は、元ニューヨーク・タイムズの大学論説の主管だったらしく、その人が責任を持って編集しています。1200校ぐらいある大学の中の300校ぐらいが載っています。アメリカ通の人に聞いてみたら、「うちの大学も FISKE に載るようになりたい」という大学も多い、と聞きました。

やはり、知らせている情報が全く違います。我々のように入試の日に一発で勝負をつけて、1週間後には発表して志願者を獲得するのは違うのです。

高校・大学の間のつながりについて、私たちはもう少し勉強しなくてはいけないと思っているところです。大学情報の日米差は、もっと正面から見ておく必要があります、改善を重ねていく必要があると考えています。

おわりに—超少子化に向けて

最後に、9年後から日本の人口はまた下がり始めます。つまり、超少子化が生まれてきて、それ以後はたぶん二度と上がらないです。本当に厳しい状況が生まれてくると思います。そのときに切り抜けていけるかどうかというのは、今何をするか、今我々が大学教育をきちんとしておくことにかかっています。それは中教審がどうこう言うという話だけではなくて、やはり各大学の努力にかかっているのだと思います。御清聴ありがとうございました。

質疑応答

(Q1) 大変面白い、ためになる話だったと思います。特に50年史や100年史が非常にタイムスパンの長い自己評価書であるという点は、目から鱗が落ちました。

ただ、それと同時に、先生がお話しになっていた、どのようなものでも、とにかく学生さんには話すのだということ、それは事実として話すということだと思うのです。大スキャンダルもお話しされた。

すると、自校史が大変スパンの長い自己評価書であることを考え合わせると、自校の歴史をまとめている資料としての客観性と、そういう事実を通しての、例えば大学の理念の評価、あるいは大学でこういうことをちゃんとやれたのだということの、宣伝というのは変ですが確認というまとめ方、つまり価値の入った視点との関係、つまり、事実と価値の切り分けというあたりは、どのようになっているのでしょうか。

(寺崎) いいことを聞いていただきまして、ありがとうございました。

実はそれは非常に大きな問題で、先ほど申したようなスキャンダルのようなことは、正史にはさすがに書いてありません。ただ、今、いろいろな大学で出ている沿革史を見てみますと、第2の出し方があるのです。それは例えば、資料集のときにきちんと書く。これは多くの大学がなさってい

ます。

もう一つは、恥になるようなことで、九大が生体解剖の人体解剖実験をやりました。あれを教えておられますかと、シンポジウムの会場から質問があったとき、九大の先生は「きちんと教えています。自校教育の中で、言葉で教えています」とおっしゃっていました。中身は一応、通史の中にも書けるところまでは書いてあります。ですから、かなりぎりぎりのところですが、意外に書く方向に動いてきていると思います。ただ、今出すことがいいかどうかという問題はあります。

それからもう一つは、ためらう理由の一つとして、恥辱の部分と、それからトラブルがあります。トラブルは、なるべく書いた方がいいと思うのです。私はトラブルに関して言えば、はっきり書いてある沿革史の方を信用します。例えばかつて教養部解体をめぐって深刻なトラブルが起きた大学があります。私は、そういうところはお書きになった方がいいと思います。少なくともどういう論理が対立したかということは、沿革史に書く必要があるし、授業の中で学生諸君に言う必要があると思います。

ちょうど戦時下の立教の伝説と同じでした。立教は、戦後公職追放が始まる前に、マッカーサー直々の指令によって、役員が11人、いきなりパージされました。1945年の10月でした。猛烈に早い時期に、まるで見せしめのようにパージが行われました。この立教首脳陣追放と同時に、総司令部は文部省に命じて、全国のキリスト教系学校において、戦時下、同じようなことをしたかどうかを調査しろと言って、学校名を全部挙げて調査を命じています。ある人物がその背後で動いたことが分かっていますが、その経過も立教の場合は資料集に全部入れました。そういうことは恥ではなく、まさに大学という組織体が経てきた経験です。

(Q1) そういう意味では、非常に書きにくいこともすべて書くという、その点で勇気の要る作業かと思うのですが、ただ、評価が微妙に分かれるようなものもあります。

もう一つは、いろいろなものを書いているのだけれども、これはどうしても書かざるをえない、書くべきだという事実の選択をする時点で、すでにある一つの理想とか、価値の選択にコミットしているとすると、書く者の視点や価値観は、どのあたりに求めることになるのでしょうか。

(寺崎) その価値観を執筆者が担って書くというよりは、むしろ沿革史の場合は、大学がそのときにどの道を選んだかを、きちんと書く必要があると考えています。大学としてどの道を選んだのかということは、なぜ選んだかということも含めて、きちんと書く必要があると思います。

建学の理念というのは、大体言葉で表現されていますが、言葉の果たす役割は大きくないと私は考えるのです。建学の理念がはっきり分かるのは、それ以後の大学が選択してきた道です。それを展望してみると、大学の体質や精神が分かると思います。

一番いい例が東大です。東大は、私は100年史の編集委員長をさせられて本当に苦労したのですが、あの大学は「建学の理念とは何か」と言われたら、ないのです。建学の理念などは何もありません。何があったかという、明治国家の理念である「殖産興業」というはっきりした理念があった。実はそれがそのまま大学の理念です。それが後に帝国大学になったときに、今度は「国家の須要に応ずる学術技芸を教授し、その蘊奥（うんのう）を攻究する」という帝国大学の「理念」がかぶせられたわけです。それは、自分が選び取った理念ではなく、全部、上から来た理念でした。

しかしその後、東大はどのように発展してきたか。いちいちの選択をずっと見てみると、やはり一定の方向を指していることが分かります。途中で国家の理念が消えて普通の大学になったのです

が、それでもやはりそれ以後、選択している道筋はあって、それを今、私たちがいいと思うか悪く思うかは別として、きちんと沿革史に書いておく必要があると思っております。

(Q2) そうしましたら、私の方から一つ。実は金沢大学の資料館で、金沢大学自体のいろいろな過程で生産しております、いろいろな行政文書などを保存しようという事業を始めたところです。実際に自校教育をやるためには、やはりそういう資料が絶対必要になるということかと思うのですが、どういう範囲のもの、どういったカテゴリーのものが必要でしょうか。

(寺崎) 行政文書に関することは、特に大きいインパクトを与える課題なのですが、どの範囲のものを、どういう形で、どこに集めるかが大事です。やはりそれは文書館(もんじょかん)の方針によろと思います。

今は文書館と言わないで、文書館(ぶんしょかん)と読んでおられますが、京都大学の場合は、一番大きな文書館を持っていて、公文書は全部一括して集めるという方法を取っていますから、大変です。大きな書庫が必要で、どんどん増えるでしょう。今後増えるものについては、選別しなくてははいけません。その選別の基準も文書館が持ちます。だから、個別の部局にある公文書について、どれを文書館に渡すべきかということになった場合、部局が恣意的な判断をすると大変なのです。しかし、全部を渡すという原理があったとする。それを全部もらうかどうか、あるいは全部保存するか選択するかの権限は文書館にある。理想的にはそのようになるべきなのでしょう。

これは府県などになると大事です。神奈川県は大変大きい県で、神奈川県の文書館の1年間の仕事のうちの3~4割は、次々に搬入されて来るダンボールに入った公文書の仕分けでした。これはとても大変な作業でしたが、やはり立派な文書館ができて、それが今進行しています。そういう点で、文書館のスタッフはうんと増やされる必要が本当はあり、山のように仕事はあります。

(Q2) そうしますと、例えば文書館が選択の役割を負うとすると、その選択の基準はまちまちである可能性もありますが、ある程度、標準化することは難しいのでしょうか。

(寺崎) 標準化するところまで、まだ行っていないのではないかと思います。国公立全部合わせた大学史資料研究協議会ができていますが、そこでも国立大学法人だけ横に並べて見ても共通基準はできていないと思います。むしろ今、進んでいるところを参考にして、だんだん作り上げていくことになるのではないのでしょうか。

(Q3) 先生の資料の最後に、東北大学の事例が一つ挙げられています。実は私は東北大学の出身なので、やっている人間もまた知っている人なので、ちょっと興味を持って見ていたのですが、お話に出てこなかったのが、どういう形でこれを出されたのかも含めて、教えていただけたらありがたいと思っております。

(寺崎) 時間に焦ってしまっていて、資料2と3についてあまり触れませんでした。特に資料3の方です。東北大学の例も、自校史を中心とした自校教育の一つのサンプルだと思います。なかなかよくできており、歴史教育を基盤に置いた教養教育というつもりで紹介しようと思いました。

これを話した方をご存知ですか。

(Q3) 今泉さんと羽田さん。

(寺崎) ご存知なのですね。聞いてみて、ごらんになると面白いですよ。

京都大学の西山先生も書いておられましたが、学生諸君が一番関心を持つテーマの一つは、戦争だそうです。戦時下、大学はどう過ごしたかを非常に知りたいと思っているようです。

2番目は紛争だそうです。紛争のことは、おじさんぐらいから聞いたことがあるけれども、何だったのか分からないというのです。桜美林でも感じました。大学紛争とは何であったかを聞きたいと学生たちが言うので、いくつもの写真やフィルムを使ってやってみました。70~80人ぐらいでしたでしょうか。そうしたら本当に分からないのです。学生たちがゲバ棒を持って隊列を組んで歩くところで、「先生、あれはどこかに工事に行ったんですか」などと聞きます。それから「どうして覆面をしているのですか。埃が立つからですか」と言うのです。「いや、違う」ということをずっと言うと、「ああ、そうだったんですか」。

彼らが最後に共通に出した感想は、「昔の学生たちは偉かった、真面目だったのですねえ」というのです。「学問とは何か、などと聞いていた。自分たちは今まで、そのようなことは考えたこともない。偉かったと思います」ということでした。ああいう事件でも、もう歴史なのです。

戦後、大学が統合するというプロセスなども、学生たちにはとても分からないことだと思います。それこそ、先ほどの旧制高校ではありませんが、四高（よんこう）と言わないで、四高（しこう）と言うのだというだけですら、彼らにとっては歴史なのです。

さらに遡っていくと、四高の生徒たちが、例えば京都まで行って三高の生徒と野球の試合をやる。当時の校友会雑誌を見ると全部、「南下軍」と書いてあります。南に下って行く。南下軍は遥かに進んで決戦をした、などと書いてあることなども、学生に教えると、「へえ」と面白がると思います。だから、「旧姓」高校ではないということすら、改めて語った方がいいのです。

この東北大学の例も大体重点はそこに置いてあります。

(Q4) これは私の個人的な興味ですが、例えばいわゆる「旧七帝」と「旧六」の学生はそれぞれ位置を占めていると思うのですが、そういう場合に旧六、ないしは旧六の一つとして見た金沢大学の役割は、教育上あると思うのです。それは先生のご専門、お立場から、どのように見られますか。

(寺崎) 旧七帝大の役割は、非常にはっきりしていると思います。理工系・医系を重点に置いた最高水準の教育研究を行う場所ということで一貫していると思います。ですから今、多くの旧帝大で学長がほとんど理工系なのは、やはり理由があると思うのです。

京都帝国大学でも、最初に開学したのは理工科大学で、当時は分科大学と言いました。次に文科大学や法科大学ができるという順序で、圧倒的に強かったのはやはり理系です。東北大学は言うに及ばず、全くそうです。というわけで、理工系と医系を中心にした最高水準の教育と人材養成を図るところが旧七大学だと思います。

先ほどおっしゃった旧六大学の方はどうなのでしょう。医系だけに限って言うと、初めは旧制高等中学校（後の高等学校）の医学部から出発しました。旧制高校が高等中学校と言っていたところに、日本の高等教育は2種類あるという考え方があったからです。高等中学校があって、その上に学部がありました。

そのほかに帝国大学の分科大学があるという構成だったわけです。高等中学校の上に付く学部の方はカレッジ、専門学校である。もっと増やしていいのだけれど、とりあえずは限定的に置く、ということで、京都の第三高等中学校には法学部もあったのです。

ところが、これは全然広がらないまま、結局、日清戦争直後までにできていた二つの帝国大学の権威も揺るがず、東北ができ、北海道ができます。高等中学校の上に付いていた専門学部である京都の法学部は廃止され、残りの医学部だけが残り、後に専門学校として独立したのです。そのうちの一つが金沢でした。金沢を含む、六つの千葉から熊本までに及ぶ、この学部の持っていた役割は非常に巨大なものでした。それはなぜかという、洋方医学を知る開業医の育成こそが国家目標だったからです。漢方医の学者は全国にいましたが、洋方医術をきちんとやれる人はいない、実はそれこそ附属病院の中で養成すべきだということで、各府県の中で、県ごとに医学校を置いていったわけです。

しかし、金沢のように、藩校時代から既に種痘所があったようなところには、非常に早く病院ができました。その病院の中の医師養成課程が後に学校になっていったという流れです。

漢方医学よりも、洋方医学の方が強いことがはっきり分かったのは、戊辰戦争です。あのときに、手術という方法、すなわちメスで開いて銃弾を出し、あるいは縫合し、あるいはその前提として麻酔をすることを教えてくれたのは、西洋医学しかなかったのです。幕末のあの内戦こそが、西洋医学の見直しの最大の機会だったと聞いたことがあります。

「旧帝大」とは違う歴史と役割を持つ国立大学の1カテゴリーが「旧六」だったということをふまえて、教えられるといいのではないのでしょうか。

《編注》

- 1 上智大学、青山大学、立教大学の頭文字をとった総称。大学受験生向けの雑誌で用いられたことから、受験生に広まった。
- 2 金沢大学「大学社会生活論」テキスト編集委員会編『知的キャンパスライフのすすめ—スタディ・スキルズから自己開発へ—』学術図書出版社、2008年。金沢大学共通教育科目「大学・社会生活論」のテキスト。
- 3 *America's Best Colleges* U.S. News & World Report 社、年2回刊行。
- 4 *The Fiske Guides* アメリカ、カナダ、イギリスの300校あまりの情報を掲載する大学・カレッジの情報誌。